

天皇一家へのまなざし…メディアはどのように扱っているか

水島たかし

松下圭一の「大衆天皇制論」

本日報告を担当する水島たかしです。今回のテーマはメディア天皇制です。これについて考えるのに、松下圭一の大衆天皇制論（松下圭一「大衆天皇制論」『続・大衆天皇制論』『中央公論』一九五九年四月号・八月号、本稿引用は『戦後政治の歴史と思想』ちくま学芸文庫、一九九四年より）を議論の軸にしたいと思います。

松下の大衆天皇制論というのは、一九五八―一九五九年の皇太子妃成婚ブーム「ミッチー・ブーム」を分析する際に提出されたものです。この時代について私自身は何の実体験もありませんが、『ミッチー・ブーム』（石田あゆみ『ミッチー・ブーム』文春新書、二〇〇六年）という便利な本も出ていまして、いろいろなエピソードが書いてあります。

一九五〇年代後半は週刊誌があれこれ創刊された週刊誌ブームの時代で、そういう中で皇太子結婚ブームは起きています。報道の前身としては、「プリンセス・ルック」や「皇室ファッション」なんかが盛んに取り上げられています。それからニュース映画でもかれらの動向が流される一方で、テレビ中継が五〇年代に始まってそれが本格化してくる時代でもあった。放送のニュースネットワークが成婚パレード放送を機に整備されるとか、テレビ受像機がまだ高価だった時代に、パレード放送目

当での駆け込みで販売台数が急増するということが起きます（日本放送協会編『放送の五十年』日本放送出版協会、一九七七年）。

また、吉見俊哉さんという社会学者が指摘していることですが、成婚パレードを見るのに沿道の家の場合には、二階にあがってバルコニーから見下ろすということがあったようです（吉見俊哉「メディア天皇制の射程」『リアリティ・トランジット』紀伊国屋書店、一九九六年）。「君主を見下ろす」という点が重要です。さらにマスコミの大量報道のおかげで、「ミッチー」へのファンレターが舞い込んだり、雑誌による「美智子さんに似た人探し」企画とか、松下圭一が注意喚起しているように、昔ならば「不敬」ととられかねないような「ブーム」だったわけです。それは、戦争のイメージがどうしても拭えない昭和天皇（裕仁）に対して、次代の天皇である皇太子をそれとは違うものとして売り出すイベントでもありました。

こうしたミッチー・ブームに対して政治学者の松下圭一が提起したのが大衆天皇制論です。彼の主張をまず確認しておきたいと思えます。

第一に、天皇制には二通りの型があると松下は言います。「威嚇型」と「親愛型」で、敗戦までは基本的に前者、つまり畏れられる存在であった。それが今は「背広姿」になって写真も「家族団らん」の中で写される。皇太子に至っては、「スキーでころんだり、テニスをやっても女の

子に負けてしまう。それに恋すらするではないか。これは天皇制の前者から後者への変化である。「今日、皇室は大衆にとってスターの聖家族となった」と松下は述べています。

そして第二に、今回のミッチー・ブームというのは天皇ブームではあるかもしれないけれど、過去の「絶対君主制」が復活したのではない。大衆天皇制、つまり「大衆」の歓呼のなかからあたらしいエネルギーを吸収しつつある」という認識を示します。かつての「皇室の尊厳」は失われたが、そのかわりに「スターへの大衆賛美」の中から正統性を調達するということです。

「絶対天皇制から大衆天皇制への移行によって、政治心理的には、天皇制はより安定したとすらみることができると。それゆえ、皇太子妃ブームはけっしてかつての天皇制の復活ではない。むしろ天皇制の機能の変化、ついでまた構造の変化をそこにみなければならぬ」。

その天皇制の機能として、大衆君主制(天皇制)というのは、「脱政治化」して「政治美」に転化することによって最もすぐれてその政治効果を現すのだと指摘します。決して大衆天皇制だから甘く考えていいということではない。

第三に、このミッチー・ブームが示しているのは、「もろもろの旧きもの」、つまり古臭い天皇制が人気取りをして「新しい粉黛」で復活したということではなくて、むしろ新しいものの方が本体になって、古臭いものが打撃を受けたのだと松下圭一は述べています。右翼による正田家襲撃計画なんかもあったそうです。

そのことも関連しますが、「平民」、つまり旧「華族」からではない、

「恋愛結婚」のイメージで起きた皇太子妃ブームというのは、松下によれば「新憲法」を前提としてのみありえた。だから新憲法ブームと呼ぶのがふさわしいとまで言っています。

大衆天皇制論の意義と限界

この松下の大衆天皇制論は今までの天皇制論と何が違うのか。共産党のいわゆる三二年テーゼ(「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」)の認識と比べるとわかりやすいでしょう。端的にはこういう規定です。

「日本の天皇制は、一方では主として地主として寄生的封建的階級に立脚し、他方では又急速に富みつつある強欲なブルジョアジーにも立脚し、これらの階級の頭領と極めて緊密な永続的プロックを結び、仲々うまく柔軟性をもって両階級の利益を代表し、それと同時に、日本の天皇制は、その独自の、相対的に大なる役割と、似而非立憲的形式で軽く粉飾されているに過ぎない、その絶対的性質とを保持している」。

こういう規定はミッチー・ブームに対しては無効だったように思われます。たとえば、井上清は「皇室と国民」という論文を書いています(井上清「皇室と国民」『中央公論』一九五九年四月号)。彼は基本的に松下の議論に反対している。

「天皇制はこんどの皇太子ブームに見られるように、強化され安定し

ているのではないか。『大衆天皇制』とかいう新しいものになったのではないか。私はそうは思わない。げんざい、天皇制を、支配階級にとって必須の王冠たらしめているものは、ただその伝統的権威だけである。だがその権威はいちじるしくうすれている。何故ならば、近代において天皇を国民の間に権威あらしめた条件のあるものは、いまやすっかり失われ、他のものも急速に失われつつあるからである。……こんどのブームは、たいしたことではない。……本当に大衆の心に食い入りうる条件がない」。

井上はこう切って捨てているわけです。

しかし半世紀を経て、いまだに天皇制が強力に生き残っているというその後の歴史を考えると、井上よりも松下の大衆天皇制というつかみ方の方に軍配が上がるように思われます。

ただし松下の天皇制認識に何も問題がないかというところではない。端的に言えば、この講座ですつと問題になっていく天皇制の「二重構造」というものの片一方しか重視してこなかったのではないか、ということです。

一つには、先ほど「古い」天皇像と「新しい」天皇像の関係について言いました。つまり古いものの方が捨てられたんだというような認識を示すわけですが、本当にそうなのか。このミッチー・ブームの時代も、基本的に祭祀天皇制であり続けています（原武史『昭和天皇』岩波新書、二〇〇八年）。天皇自身は自分を神の遣いとして祈り続ける存在だった。（当時の）皇太子夫婦も、成婚の「報告」に伊勢神宮を参拝しています。映像を見ると、よりによってシルクハットで伊勢神宮に行っていて、いかななものかと思えますが（笑）。要するに、大衆の歓呼の中で

スターとして人気を得た天皇制も、裏で「やることはやってる」というか、神様との関係の儀式というのを欠かさないわけです。そういう面が必ずある。

さらにこの当時のミッチー・ブームは確かに盛り上がったけれど、たとえばイギリス王室のような形で常にマスメディアにちやほやされる天皇制が維持されたかというところではない。いわゆる「開かれた皇室」というのは実はなかなか実現していない。昨今の雅子バッシングをみても分かるのとおり、女系天皇は認めないとか、雅子が祭祀をしないのは問題じゃないかとか、やはり「古い」伝統主義的な観念に拘泥しているわけです。天皇制は結局そういう面を引きずらざるを得ない。

さらにミッチー・ブーム直後に、「風流夢譚」事件も起きている。これは深沢七郎の「風流夢譚」に対して右翼が激しい攻撃を仕掛け、中央公論社社長宅で殺傷テロも起きたという事件です。ミッチー・ブームでは、確かに美智子のプロマイドやらスリーサイズまで明らかにする「不敬」な報道もあったわけですが、一方で「天皇制を馬鹿にするのは許せない」という右翼のテロリズムも健在だった。むしろ六〇年安保闘争で危機感を抱いた自民党筋によって右翼が育成されたという話もあって、この頃から勢力を増してきたとすら言えるかもしれない。いずれにせよ右翼の暴力装置も稼働している。だから松下の大衆天皇制論というのは片面の指摘でしかない。

さらに、松下は大衆天皇制を「新しい現象」として打ち出したわけですが、実はこうした展開は戦前からあったのではないか。先に言及した吉見俊哉さんは、昭和天皇への「代替わり」のとき（一九二〇年代）既にラジオ放送網の完成などメディア天皇制が始まっていることを指摘しています。また、芸能スキヤングル的な皇室へのまなざしというのも既に

戦前からあった(右田裕規「戦前期『大衆天皇制』の形成過程」『ソシオロジ』二〇〇二年第四七巻二号)。あるいは一九二〇年代の王室の世界的危機のなかで、日本の天皇・皇族も積極的にスポーツをやったりと、人気取りをして国民の中に根付こうとするという動きも見せる(坂上康博『権力装置としてのスポーツ』講談社選書メチエ、一九九八年)。

したがって一九六〇年前後で途端に新しくなったのではなく、実は昔からそれを使い分けている。そういう「二重構造」がずっとあることを、松下は捉えきれしていない。

その後の天皇制

ともかく六〇年頃に大衆天皇制として開花したのは確かです。それが次第に深まっていったのは七〇年代にかけてでしょう。裕仁の訪欧(七一年)・訪米(七五年)があります。

天皇が外国を回ることで、日本国内で戦争責任があまり言われなくても、外国では追及する声が出てきます。こうして天皇の戦争責任論というのが再浮上してくる。しかしそれ以上に、そもそも天皇が外に出ていくということ自体が「皇室外交」、天皇を積極的にそういう装置として使うということなのです。つまり国内的にも「見せる天皇制」につながっていく。

たとえば、七五年の訪米のときに、皇后のスマイルとか表情を大写しするというテレビ報道がかなり話題になったようです。そのことを通じて天皇制への支持を作り出すのではないかという批判が出されています(高島通敏編『討論・戦後日本の政治思想』三一書房・一九七七年、一六七頁の色川大吉発言より)。

「皇室外交」は明仁時代に全面化するわけですが、こうした動きが七〇年代くらいから始まっている(もともと明仁自身は皇太子として六〇年代から盛んに「外交」しています)。

さらに八〇年代には、大衆天皇制ではあるけれど、それがもう一段階深まったということで、天野恵一さんが「情報天皇制」という規定をします。

「一九八六年……天皇在位六十年奉祝のキャンペーンと浩宮の婚約者キャンペーンが吹きあれた一年でもあった。この段階で、再編成されていた大衆天皇制は〈情報天皇制〉段階へと明確に転換したととらえることは可能だと思う……。核家族のマイホーム主義意識・企業共同体主義と連動した大衆天皇制は、核家族の危機、企業共同体の解体あるいは縮小によって変質を強いられたのである(大衆天皇制を支えた「幻想」の減少)。もちろんその『非政治』をタテマエとする民衆の憧憬を組織するシンボルである『人間』＝象徴天皇制という本質に変化はない。ただそれが何のシンボルであるかという点、その内容が変質したのだ。企業統合力の縮小にもなって、全面にせり出した天皇(皇室)は、『国際化』時代の社会の選別―競争―能力―差別主義の強化と対応して、大衆天皇制時代の『庶民性』よりは(その「民主主義社会」における)『貴族性』がクローズアップされるようになってきた」(天野恵一『情報社会の天皇制』社会評論社、一九八八年)。

要するに、〈家族―企業〉共同体と結びついていた大衆天皇制が、それら共同体の解体の中で次の段階に転換したというのが天野さんの主張です。これが八六年時点の「情報天皇制」規定です。

では九〇年代以降はどうか。二〇〇四年に私が書いた「松下圭一の大衆天皇制論を読み直す」（水島たかし「松下圭一の大衆天皇制論を読み直す」）（桜井大子編『雅子の「反乱」社会評論社、二〇〇四年』）という文章がありまして、これの末尾で今後の天皇制について簡単な考察をしています。そこでは、「情報天皇制」について触れてはいますが、あまり深く検討していませんでした。しかし改めて両者を比べてみると、一五年以上の時間差があるにもかかわらずほとんど同じような結論になっています。私の場合は、「恋愛結婚」と「幸福な家庭」というものが成り立たなくなっていることを指摘していますが、これは強調点の違いに過ぎません。問題の構造は同じなのです。

おそらくこれは、大衆天皇制が安定していたあとの崩壊期に八〇年代以降入って、その後の一步をどう踏み出すかということで、二〇年以上天皇制側の試行錯誤が続いているということではないか。今の時代、国民統合にとってどういう天皇像を示すと都合がいいかということをお願いしている状態だということなのでしょう。

天皇制はなぜなくすべきか

ところでなぜ天皇制は撤廃されるべきなのでしょう。最後に、大衆天皇制のメカニズムとその役割について考察してみたいと思います。

特にメディア時代の天皇制を考えるには、「イデオロギー装置」という概念が有益だと考えます。これはアルチュセールというマルクス主義哲学者の用語ですが、やや緩く用いると、要するに、人々の内面を生み出すような行動を導く物質的規制のことだと言えるでしょう。

アルチュセールはパスカルの言葉を引用しながら、こんなことを言っ

ています。

「ひざまずき、唇を動かして、祈りの言葉を唱えなさい。そうすれば、あなたは神を信じるだろう」。つまりパスカルは……事物の秩序をスキヤンダラスにひっくり返したのである」（ルイ・アルチュセール『再生産について』平凡社、二〇〇五年）。

普通は、まず内面や動機があつて、それに基づいて目的と手段の関係で行動すると考えられています。しかしアルチュセール（あるいはパスカル）によれば、実は、先に行為がある。何らかの実践があつて、そのことで内面が作られていくという回路があるのではないか。つまり、ひざまずき祈りの言葉を唱えたと神を信じるという順序です。

これは経験的にも合点のいく話でしょう。だからこそ、儀式・儀礼を国家の側は手放さない。たとえば「日の丸・君が代」の強制では、教員に対して、「校長の職務命令は公務員としての形式を実行させているに過ぎない。内心でどう思っているにしろ内心の自由は守られている」と正当化するわけです。しかしまさに「形式」を作り出すことで内面を奪おうとしている。命令される教員の内面にもいろんなことが起きますし、卒業式などの儀式空間の内部にいる人たちも、批判が許されない内面的状態に置かれます。

大衆天皇制は、直接警察権力を動かすとかそういうことではないにせよ、イデオロギー装置として人々の内面をコントロールする大変重要な国家装置なのです。そしてそこではやはりマスメディアの役割というのも欠かせない。

では具体的に、マスメディアは天皇制に関して何をしているかという

ことを見てください。

第一に、マスメディアは争点を限定します。ある条件の内部では「言論の自由」はあっても、それ以外の、たとえば天皇制廃止などという「言論の自由」は基本的には認めない。最近でも、女系天皇をめぐって賛成か反対かというのはあっても、天皇制をやめましょうという人はマスメディアにはなかなか出てこれないわけです。

ちなみにマスメディアの「効果（影響力）」をめぐる研究では、「議題設定（アジェンダ・セッティング）機能」ということが言われています。かつては、マスメディアの主張を受け手はそのまま受け入れるといった説もあつたわけですが、現実はそのままだけではない。ではどういった影響を与えるのかということで議論がされてきました。そして最近では、是非かという結論（主張）を植えつけるよりも、「議題」を限定する機能があるのではないかという話になっていくようです。たとえば、二〇〇五年の小泉・郵政選挙でも、マスメディアは必ずしも小泉に賛成しろと言ったわけではない。しかし「刺客」対「抵抗勢力」という図式で報道することで、そのどちらかを選ばなきゃいけないような空気を作り出してしまった。天皇制についても同じことで、天皇制の「あり方」をめぐる対立してもいいけれど、天皇制をなくすという「議題」は異端としてカットされる構造になっているわけです。

さらに、こうしたマスメディアの土俵を方が一はみ出してしまった場合には、VAWW・NETのNHK改竄問題が典型ですが、右翼による「実力行使」があり、国家権力（自民党政権）も動いて、最終的に踏み潰すという仕組みになっています。

第二に敬語報道です。先のイデオロギー装置の議論を踏まえればわかるとおり、天皇に「陛下」なり「さま」なりを必ずつけるといって「実践」

がその内面を作り出すことになるでしょう。天皇・皇族に対しては下の句で「さま」とつけないと人々は不安を覚える。友人と雑談していて、私が「雅子」と呼び捨てにするとみんなギョツとして場が固まる（笑）。別に敬意は関係ないけど、「天皇」と来ると「陛下」。そういう語のつながりが「普通」になれば、呼び捨てはギョツとされる。つまり同調しない人は異端とされる。そのうちに、なんだか知らないけど「陛下」とか「さま」とつけてるから偉いんじゃないか、という気になってくるのだと思います。

第三に、結婚やら出産やらの「皇室イベント」で儀式が行われたり、あるいは今の皇室スキャンダルでさえも、洪水的に報道されることでも人々の内面は作られます。天皇家の家族行事なぞ、果たして「ニュース」の名に値する情報かどうかともわからないまま、しかしそうした報道に一日中晒される。晒されることで、実際に大切な情報だったと思込む逆転が生じるのではないのでしょうか。結婚でも葬儀でも、別に天皇家で何があろうと本当は自分と関係ない「事件」のはずなのに、なぜか生中継されたりする。そういう報道は嫌だ、あるいは興味ない、という人も含めて「関心」を持たされてしまうことには変わりないわけです。つまり洪水報道を介して天皇制にひきずりこまれてしまう。

つまり、野次馬的であれ何であれ、関心をまず惹起させる。中身はどうであれ、注目させ意識させる。そういうマスメディアの形式的機能に加え、イデオロギーの内容としても、日本のマスメディアは基本的に天皇の戦争責任を大々的に主張しない構造になっていますので、（平和と民主主義）の天皇というイメージが刷り込まれる。そしてそれにあからさまに反抗する人たちはメディアからは排除するし、言論としてもなかつたことにする。こういうメカニズムで、マスメディアが天皇制の再生産

機能を果たしていると思われれます。

ではそのように成り立っている大衆天皇制はどのように機能しているのでしょうか。

まず天皇が何かを言うことで反対派を取り込むことができます。これは明仁即位のときの「護憲」発言が典型でしょう。それから「中立」「非政治」だという建前のもとで、自衛隊のイラク派兵を賛美（二〇〇四年）してみたりもします。こうすることで、イラク派兵自体が「中立」の装いを獲得するわけです。さらに、国民体育大会のような国家的イベント・儀礼に対して、天皇が参加することで箔がつく（権威づけられる）と同時に、「天皇が来るのだから」とますます儀礼色が強められる（「非政治」の名の下に、より強力にイデオロギー装置が稼働できる）ことになります。

また、天皇制があること自体が「日本の伝統が続いている」ということのアリバイになっています。皇族の結婚騒ぎになると、「血統」とか「家柄」とか、日本国憲法下ではあつてはならないはずの用語も大々的に流通します。

さらに、それほど「保守的」な考えを持たない人でも、いろんな意見が言えるような天皇制ならいいという「開かれた天皇制」という立場に陥りやすい。しかしこれは擬似的民主主義です。限定された「参加」意識はガス抜きに過ぎません。

そして、天皇がいるから、「天皇制のために」を口実として右翼テロが絶えません。先に見たように、右翼暴力も（大衆）天皇制に組み込まれているのです。

このように、大衆天皇制もまた十分に害毒であることは明らかです。先に見てきたようなメディア時代の天皇制のカラクリを暴きながら、天

皇制をなくすための知恵を絞っていきたいと思います。

（みずしまたかし）